
技術大国日本

じじじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

技術大国日本

【Nコード】

N4008Q

【作者名】

じじじ

【あらすじ】

プログラム全盛時代。ショートショート。

日本最先端技術研究所は、その名が示す通りの施設である。技術大国を自称する日本がまさしくその技術で世界をリードしていくことが出来るように設立された、先進的な研究機関である。

そこでは、特にソフトウェア開発部が最も盛んに活動していた。

ソフトウェアはその専門知識を持ったプログラマがプログラムを手打ちする——という時代も今は昔。現在ではプログラムも他の工業製品と同じように、機械が自動的に作成してくれる。なので古い意味でのプログラムを作成するプログラマという言葉は使われなくなり、現在のプログラマの意味は問題分析とソフトウェア設計だけをやってソフトウェアを製作する人間のことを指した。そして、ソフトウェアは多人数のプロジェクトとして製作されることはなく、現在では、たった一人の人間の、特定の分野の専門知識を持つものだけによって製作されていた。

要するに、一人の優秀なプログラマだけで、ソフトウェアが製作されるようになっていた。

それは日本最先端技術研究所ソフトウェア開発部でも同じだった。たった一人の研究者がソフトウェアを設計、製作し、納品や保守に至るまで、他の研究者はそれに携わることはなかった。それどころか誰が何のソフトウェアを担当しているかは末端の研究者はお互いに全く関知していなかった。ならば上司はどうかと思うかもしれない。けれど、彼らを形だけ取りまとめているだけの上司では、資料なしには各担当を答えることはできない状況だった。

だから休憩時間の談話室で、各研究員の担当業務の自慢大会が行われるのは当然だった。研究員——日本全国から集められた優秀な技術者というのは自慢したがり of の性質を持っていた。その自慢大会には研究員の皆が参加した。誰もが話さずにはいられなかった。ソフトウェアを作っているときは一人なのだから、休憩時間くらい他

人と何か話していなければ息が詰まるどころか正気でいられないということもあったのだ。

□

その日も自慢大会は行われていた。

そこで、ある研究員は他の研究員に自慢する。

「知ってるかい。まあ知らないだろうから、教えてやるよ。」

俺が今作っているソフトウェアはな、ワールドカップの試合を全世界に同時中継するシステムだ。それも、なんと、実際のサッカー場に立体映像を映すんだぜ。本物の選手がまさにそこにいるみたいにな。これで現地に向かわなくてもワールドカップが楽しめるっていうもんだ。

どうだ、驚いたか！」

その言葉を聞いて、別の研究員が鼻で笑った。

「ははは、その程度かい？ 僕はね、そんなものじゃないよ。」

君たちが読んでいる漫画、見ているアニメを思い浮かべてご覧。

その7割には、作画に僕の自動描画システムが使われているんだよ。海外ではフォトリアスティック、つまり写実的な描画しか目を向けられていないから資料が少なくて困ったけど。3Dモデルからまるで人間が描いたかのような絵が作れるようになったんだ。NPR、アートベースドレンダリングの新しい技術を完成させたんだ。

あとね、我が国にはクールジャパン構想があるからね、これは多くの予算を貰えるんだ。僕の給料も5割増し、いやもっと増えたものだよ。」

給料の話には他の研究員は沸いた。笑うような声で「その視点はなかった」「がめつい奴め」と声が上がった。

その声を制するように、次の言葉が続いた。

「おいおいおい。僕はね、全世界に採用されている金融システムを作ったんだよ？」

それらは全部ネットワークで繋がっていて、そいつをちょっと弄れば、どの銀行口座にだって金を流せる。この研究所の予算だって、大部分はそうやって手に入れたものだっていうのに」

「それを言うなら、各省庁の書類管理システムを作った僕に感謝して貰いたいもんだね。そいつで不正な金の流れを書類で誤魔化さなければ、君は今頃、職権乱用か何かで豚箱の中だ」

わいわい、がやがや、研究員たちの騒ぎは続く。

やがて、話をするのに順番という順番はなかったが、新入りにタスキが回ってきた。

「おい、新入り。お前は何を作ったんだ」

「……あ、ええと、僕は、政治管理システムを作っています。今の時代、どこの国も重要な判断はコンピュータに任せて政治家は形だけになっていて——まあ一般の人はそのことを知りませんが——その判断をするソフトウェアを製作しています。」

けれど、これがなかなか上手く行かなくて……」

おどおどしている彼に、別の研究員が言葉をかけた。

「それは奇遇だね。自分もアメリカの政治管理システムを作ったよ。あれは大変だった。」

設計の際に冗談でアフリカの少数民族出身のオパイとかモマイと

かいう奴を大統領にしたんだけど、余程上手くいったのかなかなか辞めさせられる気配を見せないよ。

——お前はどこの国を作っているんだい？」

問われ、その新入り研究員は答えた。

「……日本です」

そいつはマズイ。

水を打ったように研究員の騒ぎは静まった。

流石に研究員たちも、己の国が上手くいっていないと聞かされては笑ってなど居られなかった。

急いで各人が知恵を出す。

「オレが思うに、とりあえず、サッカー場に使う立体映像システムを応用して仮想の政治家を作って不祥事を起こさないようにしたらどうだ。全部ソフト任せ。末端に人間が関わっているから上手く行かないんだ」

「それより政治家たちをアニメにした方が国民の反発が少なくなると思うよ。僕の作ったシステムを使えば簡単さ。それに、人気が出たらグッズも売れて、国庫がこれまでになく潤うって」

「いやいや、財政が危ないならオレが直接金の流れを弄るまでだ」
「書類もな」

「……でも、まずはどうすれば日本が良くなるか手段を算出するソフトウェアを作らないといけない」

そう結論する。

が、政治の専門家ではない彼らでは政治ソフトウェアをどのように作ればいいのかからなかった。

さらには、今から作っていても間に合わないのではないか、とい

う問題があった。

研究員たちは皆、頭を抱えた。

けれどそこは日本全国から集められた俊才集団だ。考えていればやがて答えが出る。

そしてその通りに、一人の研究員が糸口を見出した。

「そうだ！ 他の国の政治システムを借りればいいんだ。そうすれば、確実安全に、しかも早急に対処が出来る。これはいい方法だ。これしかない！」

—— おおい、誰か他に政治システムを作っている奴はいないか？」

「ああ、やっているにはやっているけど……」

呼び掛けに応じた彼は、おずおずと手を挙げた。

「…… アフリカの少数民族が総理大臣になってもいいのなら」

□

後日、公正なる選挙の結果、アフリカの奥地からやってきたパンパカパーンという男が日本国首相となった。各界からの反発はあったが、それらの動きは時間と共に鳴りを潜めていった。

技術大国を標榜しているのだから、技術の結晶であるソフトウェアの判断は絶対であり、反対する意見が軽視されるのも当然の流れである——と、ある雑誌の記事は言う。

もちろんこの記事は自動雑誌記事生成システムが考え出したものである。それを自動記事チェックシステムが内容にOKを出し、自動雑誌印刷製本システムが現物を作り出し、自動流通管理システムの下に全国書店に運ばれた。

さてはて、これが世に出てどうなったのか？

もちろんその記事はごく少数の善良な市民によつて批判された。けれどそれが握りつぶされたのは当然の流れである――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4008q/>

技術大国日本

2011年1月28日03時58分発行